2022年度

愛 知 の 特 別 支 援 教 育

（第51集）

もくじ

Ⅰ　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅱ　授業実践
　小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅲ　第72次教育研究活動のまとめ
　１　学習指導をどうすすめるか・・・・・・・・・・・・・・・・5
　２　人とかかわる力を育てるための指導・・・・・・・・・・・7
　３　特別支援教育をどうすすめるか・・・・・・・・・・・・・9
　４　助言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　５　まとめと今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

愛知教職員組合連合会　教育課程研究委員会特別支援教育部会

2022年度　　教育課程研究委員

ブロック推薦　　◎部長　○副部長

名古屋			尾張			三河		
氏　名	単組	学校名	氏　名	単組	学校名	氏　名	単組	学校名
○田中　洋樹	名古屋	天白養護	岩田　憲人	愛知	(長久手)西小	朝倉　貴行	田原	童浦小
森　はるか	名古屋	有松小	湯浅　直子	尾北	岩倉南小	○吉原　智美	碧海	知立南中

第69～71次教育研究全国集会リポート提出者

69次			70次			71次		
氏　名	単組	学校名	氏　名	単組	学校名	氏　名	単組	学校名
◎田口　孝典	海部	永和小	－	－	－	－	－	－

第72次教育研究全国集会リポート提出者　　近藤　奈歩　（名古屋・大生小）

Ⅰ　はじめに

地域や学校などにおける障害のある子どもたちをめぐる動向は、本人や保護者の教育に対するニーズの高まり、卒業後の進路の多様化、インクルージョンやダイバーシティの理念の浸透などがみられるところである。すべての人が生活しやすい環境をめざす「ユニバーサルデザイン」の考えは、さまざまなところに生かされるようになり、障害がある、ないにかかわらず、すべての子どもたちに適切な支援をすることの重要性が理解されるようになってきた。そのため、支援を必要とする子どもたちのニーズを把握し、学校・家庭・地域が連携して支援を行っていくことが強く求められている。

特別支援教育部会では、これまでもさまざまな状況におかれている子どもたちに対して、一人ひとりの豊かな学びのために、どのように教育課程を編成していけばよいか検討を重ねてきた。特別支援教育における「基礎・基本」は「生活する力・生きる力」そのものである。さらに、子どもたちの主体性や創造性を育てながら、体験や知識をもとに自ら判断し行動できる力を「生きてはたらく力」ととらえ研究をすすめてきた。

本年度の研究においても、子どもの教育的ニーズを的確に把握し、学習意欲を高めるような学習活動や教材の工夫をした実践、人とかかわる力やコミュニケーション能力を高める実践、個々の子どもの発達の状況に応じた生活単元や自立活動の工夫をした実践、子どもの実態についての共通理解や通常の学級への移行支援に関する実践などが報告された。

これらの実践で行われたように、子どもたち一人ひとりのもっている能力や個性を最大限に引き出し、学習の成果が生活に生かされていくことで、子どもたちの自信を高め、自立や社会参加の基礎を育てることができると考える。

そして、人とかかわる活動や作業的・体験的な活動を多く取り入れて学習に取り組む中で「生きてはたらく力」を育むにはどうしたらよいか、学習した内容を日常生活にどのように生かしていくか、教員が子どもたちへの理解を深め、前向きに学んでいけるようにするにはどうしたらよいか、などの観点から教育内容を検討していきたい。

Ⅱ　授業実践

一人ひとりの教育的ニーズに応じた学習支援の充実
－児童が集中して活動に取り組みやすくなる姿勢の保持をめざす実践を通して－

長久手市立西小学校　岩田　憲人

（１）　はじめに

１年生である本学級の児童の数名が、入学当初から授業中に姿勢の保持ができていなかった。姿勢については、国語や書写の授業でも４月のはじめに扱われている。学習したときはとてもよい姿勢をとろうとしていたが、時間が経つにつれてそれが崩れていく様子がみられた。中でも時間が経つと椅子の座面に正座してしまったり、机に突っ伏してしまったりする児童もみられ、書かれたノートの字は乱雑になっていた。ゲームが好きで運動はあまり得意ではないという児童も多く、普段の生活の中で「よい姿勢を保持する」体験が少ないことが原因と考えられる。そこで、よい姿勢を保持し、授業に集中しやすくできる手だてを考え、実践することとした。

（２）　実践の内容

①　視覚と聴覚による支援

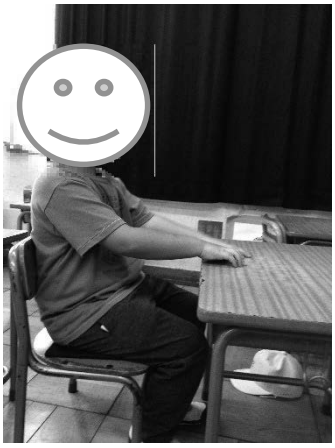
授業の導入で、学級全体でよい姿勢をつくる活動を行った。方法は日直に号令をかけさせ、掲示物を確認する。次に「よい姿勢の合い言葉。ぐう・ぺた・ぴん」と全員でリズミカルに言いながら姿勢を直す。これにより、視覚と聴覚に働きかけながら姿勢をつくり、活動に切り替えて集中しようとすることができる。

②　支援ツールの活用

椅子の座面から臀部が前に滑っていく様子がみられ、上体を支える運動機能が低下していることが考えられた。そこで、滑らないように滑り止めマットを一部の児童に活用し、姿勢の保持をできるよう支援した。

③　下肢の運動機能の向上

②で述べたように運動機能の低下が要因であれば、それを改善する機会を設ける必要がある。そこで、休み時間を活用し、片足立ちで競走する「けんけんレース」や、じゃんけんの勝敗で動物の動きのまねを変えていく「進化じゃんけん」などの遊びを係に企画させた。運動経験の積み重ねで姿勢の保持をめざすこととした。



【写真】滑り止めマット使用時の姿勢

（３）　成果と課題

全体で声かけして活動したり、遊びを通して運動を行ったりしたことでどの児童も抵抗を感じず、楽しそうに活動する様子がうかがえた。シートを一枚敷くことで「滑らない、すごい」と喜び、活動に集中できる姿もあったが、シートを借りることを恥ずかしいと感じる児童もいて、活動をやりたがらなくなる児童もいた。また、反対にシートに頼りすぎていて、シートがないと姿勢は崩れたままの児童もいた。実態に合わせて支援をしていく必要があると感じた。遊びについては休み時間を楽しみにしていて「今週はいつやるの」と係の児童に質問していた。「今日は疲れた。足が痛い」と笑いながら言う姿もみられ、継続していきたいと感じた。

（４）　おわりに

全員で活動したり、支援ツールを活用したりするだけで、抵抗なく活動できる児童が増えたのはよかったと思う。ただ、「できないから支援する」のではなく、児童の気持ちに寄り添った支援が必要なのだと改めて感じた。今後の工夫を考えて実践していきたい。

一人ひとりの活動を支える指導・支援の工夫
－音楽科「みんなで楽しく合奏をしよう」の実践を通して－

知立市立知立南中学校　吉原　智美

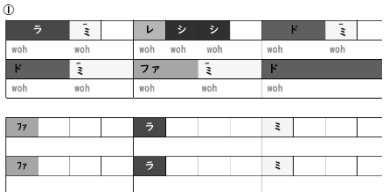
（１）はじめに

本校では、文化祭で合唱コンクールや文化部の発表、有志による発表を行っている。特別支援学級の生徒は、交流学級で合唱コンクールに参加しているが、それ以外に、特別支援学級の生徒たちが独自に活躍できる場をと、毎年、合奏の発表を行っている。生徒たちにいろいろな楽器の音色や、奏法に親しんでほしいという思いから、多くの種類の楽器を用意しているが、楽器の種類が増えるほど、１時間の授業の中で教員が個々に指導できる時間が少なくなってしまう。そこで、楽譜を工夫したり楽器の調整をしたりすることで、生徒たちが自分の力で演奏の練習がすすめられるようにしようと考えた。

（２）実践の内容

① 音符を使わない楽譜の作成

市販の合奏用の楽譜は、当然音符を使ったものばかりである。そこで、視覚的にわかるように、音を鳴らす部分に色をつけた図形楽譜を作成した【資料①】。音の長さは長方形の横幅で表し、色はキーボードに貼られているシールと対応している。これによって、従来の楽譜を読むことが難しい生徒も、自分の力で練習に取り組むことができた。



【資料①】音符を使わない楽譜

② ギターのチューニングの工夫

生徒たちは、普段なかなかふれることがない楽器に対して、高い関心をもつ。ギターもその一つで、演奏したいという生徒が多い。しかし、ギターのコード弾きは難しく、かなりの練習が必要となってくるため、途中であきらめてしまう生徒も多い。そこで、本来のチューニングではなく、オープンチューニングを取り入れ、また、ボトルネック奏法を用いることで、難しい技術を使わずにコード弾きをすることができるようにした。合奏でとりくんだ曲の原曲はCmだが、キーボード演奏をする生徒が黒鍵をあまり使用しないようにするために、３度下げてAmに編曲をし、ギターのオープンコードがEmとなるようにチューニングをした。そうすることで、生徒たちは途中であきらめることなく、練習に取り組むことができた【資料②】。

【資料②】
ギターの練習をする様子

③ タブレット端末を利用した練習

楽譜だけでは楽器を鳴らすタイミングがうまくつかめない生徒には、教員が範奏をしている動画をタブレット端末で見ながら練習ができるようにした【資料③】。生徒が練習する様子を見ていると、範奏する教員の動きを見てから楽器を鳴らすため、タイミングが少しずれてしまうことがわかった。そのため、映像では、４分の１拍程度早く楽器を動かすようにし、音声は楽譜通りのタイミングで流れるようにすることで、拍の流れに乗って演奏ができるようになった。

【資料③】　範奏の動画

（３）おわりに

指導や支援の方法を工夫・改善することで、生徒たちが自分の力で自発的に活動を継続できた。文化祭では、生徒たちは練習の成果を発揮し、すばらしい合奏発表をすることができ、達成感を得ることができた。このような取り組みを今後も継続したい。

Ⅲ　第 72 次教育研究活動のまとめ

１　学習指導をどうすすめるか

（１）　各研究活動の傾向

名古屋は、「夢にむかって自分の力を発揮することができる児童の育成　～自立活動の指導を通して～」というテーマでの研究であった。将来の夢をもっているにもかかわらず、将来の夢が漠然とした「憧れ」になっており、夢に近づくために何が必要かわからなかったり、自分の力が将来の夢へとつながっていることに気付くことができなかったりする実態があった。そのような児童が、自分の力が将来につながっていることに気付くことができることをめざし実践がすすめられた。実践では、自立活動の６区分で表されている内容を「自分の力」とし、その力をイラストで表したワークシートを用いて自分がもっている力を理解できるようにした。さらに、自分の力と将来の夢を結びつけるため、児童が将来なりたい職業に就いている人にインタビューし、それをもとに必要な力を自立活動の６区分に当てはめることで、自分の力と将来の夢を結びつけて考えることができた。実践の成果としては、自分の力を理解し将来の夢や日常の具体的な姿を結びつけて考えることができたと報告があった。

一宮は、「個に応じた有効な教材、教具の工夫と活用　－クロムブックの活用を通して－」というテーマでの研究であった。クロムブックを用いた学習には集中して取り組むことができる生徒の実態から、クロムブックを効果的に活用した授業実践が報告された。言葉に対する興味関心がある生徒の語彙を増やすことを目的に「ことわざかるたに強くなろう」の実践を行った。ことわざの意味を知ることで、かるたの絵と意味を結びつけられるようにするため、ことわざの意味をクロムブックで調べた。クロムブックが使えることで、授業に対する意欲が高まり、自分の調べたことわざかるただけでなく、他のカルタも自信をもって取ろうとする姿がみられたと報告があった。作業の時間に、クロムブックを用いた実践も紹介された。野菜を用いたレシピをクロムブックで調べたり、調理の実際の様子を動画で見たりした。特に動画視聴は、作業の手順を視覚的に理解でき、繰り返し見ることができるので有効な支援になった。今後もさまざまな実技教科で取り入れていきたいと報告された。

海部は、「主体的・自立的な生活を送ることのできる生徒の育成　－肢体不自由のある生徒への動作法と筋力トレーニングの実践を通して－」というテーマでの研究であった。脳性まひによる痙直型の体幹機能障害があり、起立位の保持が困難な生徒に対し、動作法や筋力トレーニングを実施することで、心身の安定や活動意欲の向上など、主体的・自立的な生活を送ることをめざした実践が紹介された。自立活動の時間に動作法の４つの訓練を行った実践では、関節可動域の拡大がみられたと報告があった。さらに、保護者やＰＴと連携を図り、本人と相談の上、休日などに自宅で継続してとりくめるようにしたと報告もあった。動作法実施後の振り返りシートには、「身体が動かしやすくなった」「すごくリラックスできた」と書かれていた。筋力トレーニングの実践では、車椅子移動で主に動員される上腕三頭筋、三角筋、広背筋のトレーニングを行った。トレーニング実施後は、移動タイムがのびるなど効果があったと報告された。筋力トレーニングを継続することで、筋力の向上とともにＱＯＬが高まり、より心身が安定した状態で自立した生活を送ることに効果があったとの報告もあった。

豊橋は、「『本物』と出会う経験から、将来の職業生活に必要なスキルを高め、働く意欲を培う生徒の育成　～知的障害学級　作業学習『ピーマンの極み－だれでも買いたくなるピーマンづくりをめざして－』の実践を通して～」というテーマでの研究であった。野菜の生産、収穫、販売をすすめる中で、質を追求した商品づくりやよりよいアイディアや工

夫を取り入れることができる力は、生徒の将来の職業生活や社会自立をする上で必要になってくるという考えから実践がすすめられた。ＪＡ豊橋に勤める専門家から学ぶ会では、実際に畑で肥料の与え方、脇芽の取り方、支柱の立て方の実演を見たり一緒に体験したりした。その後の授業では、講師に教えていただいたことを意識した言動がみられたと報告があった。これまで何となく水やりをしていた生徒が、質の高いピーマンづくりの方法を理解し、実践することができたと報告もあった。さらに、収穫したピーマンを販売するとき、どのような包装で販売されているのかをタブレット端末を用いて調べる活動をした。袋についていたラベルやイラストに興味をもった生徒は、「こんなラベルをつくってみたい」という思いをもった。そのような生徒の思いを取り上げ、生徒どうしで話し合いオリジナルラベルを作成した。実践の成果として、生徒は喜びや達成感を得ることができ、働く意欲を培うことができたと報告された。

岡崎は、「一人ひとりの子どもが主体的に学び、深め、広げていく学びのあり方　－算数科『ようこそ！さくら１組占いの館へ！』の実践を通して－」というテーマでの研究であった。在籍する児童それぞれが自分の関心のあることがはっきりしている特性を生かし、算数科において主体的に学ぶことができないかと考え、自分の好きなものを選択肢に用いることができる占いという題材を選び単元が構想された。実践では、児童が関心のあるテーマで自分の占い屋を決定し、その後、どの計算で占いをするのか、どの位の数字で占いの結果を決めるのかを教員と相談しながら決めた。また、１時間の授業で何をしたらよいのか、児童の実態に合わせた目標を設定し、児童自身が理解し計算に取り組めるようにした。児童の振り返りでは、「占い屋が楽しかった。またやりたい」「１０のおともだちを考えて、ブロックを使って計算用紙に計算できた」という声が聞かれたと報告があった。児童一人ひとりの好きなことや興味のあることを学習に取り入れることができ、１時間楽しみながらひたすら問題を解く姿から、子どもの学習への意欲を高めることができたと報告された。

刈谷は、「伝える力、聴く力を伸ばし、自信をもって友だちとかかわる子の育成　～生活単元学習『じゃがいもをおいしく変身させよう』の実践を通して～」というテーマでの研究であった。人前で話をしたり、注意深く話を聴いたりすることに困り感がある児童が伝える力、聴く力、自信をもって友だちとかかわる力をのばしたいと考え単元が構想された。発表するための準備では、試食会の様子をタブレット端末で動画撮影したことで、児童は食べたときの感想を想起することができ、考えたことや感じたことを整理し、学習プリントなどにまとめることができたと報告された。児童が発表して考えを共有するとき、スライドで発表内容を提示することで、聴覚だけでなく視覚からも情報をとらえることができるようになり、注意深く話を聴くことに困り感がある児童にとって有効であったとの報告もあった。単元構想を工夫し、自分の考えをまとめ、発表する機会を２回設定したことで、１回目に学んだことやのばした力を発揮し、よりいきいきとした様子で自分の考えを伝えたり、友だちとかかわり合ったりすることができたとの報告もあった。

蒲郡は、「かかわり合いながら生活を改善しようとする生徒の育成　～自立活動『わかりやすく飾ろう！自作生活マニュアル』の実践を通して～」というテーマでの研究であった。パソコンを用いた作業が好きな生徒の実態をいかし、自作生活マニュアルをパソコンで作る課題を設定した。実践のポイントとして二つ提案があった。一つめのパソコンの活用では、まずはじめに、パソコン操作と複数手順に慣れるために、タイピング練習とＮバック課題にとりくんだ。次に、画像検索にとりくんだ。さまざまな作品を観て、自分のつくる作品の手本にした。その後、生活の振り返りをするためマニュアルづくりを行った。二つめのポイントのかかわり合いでは、自分の活動を整理するため、データチャートを活用した。自分が工夫したことを仲間から認めてもらい、自己肯定感が高まったと報告された。

成果として、マニュアルづくりを通して、見通しをもつことができ、卒業後も意識できる継続性のある生活改善につながった。また、マニュアルづくりのかかわり合いを通して自発的にとりくむ場面が増えていった。以上より、パソコンを用いて自作生活マニュアルをつくることは効果があったと報告された。

（２） 討論の中心

各レポートの提案を受け、ＩＣＴ機器を使用する際、苦労したことや課題をどのように改善していったのかについて意見が交わされた。教員が意図しないタブレット端末の使用の仕方があるなど、たいへんなこともあるが、試してミスしながら調整していったほうがいいという意見が出された。名古屋では、タブレット端末の使用に際し、事前にトラブルが予想されたことから、校内でタブレット端末は学習に使用すると情報共有し、児童に伝えたと話があった。また、タブレット端末を使用すると、児童の抵抗感が少なくスムーズに学習に取り組めるため、学習の導入として使用するという意見も出された。一方、鉛筆を用いて字を書くという習慣が薄れていくという面も見られた。そのため、授業のはじめに、タブレット端末を使用する場面とタブレット端末を使用せず鉛筆を用いて取り組む場面に分けることを伝え、導入としてタブレット端末を用いて抵抗感を無くし、その後は鉛筆を用いて紙に書く学習を基本としていたとのことだった。さらに、なぜタブレット端末を使用するのか、児童生徒の特性をふまえた使用の目的、使用の意義を教員がきちんともっていることが大切だという意見も出された。困った点として、タブレット端末を利用しているとき､やめられなくなってしまう児童がいるという意見も出た｡その意見に対して、児童の興味関心に寄り添い児童のやりたいこと知りたいことを理解する姿勢をもち、児童の興味関心のあることを児童以上に教員が知ることで、児童が教員の指示を受け入れるようになったという意見が出された。稲沢ではスカイメニューにログインすることで、時間になると強制的に操作できなくなる機能を用いている。低学年のうちに、時間になれば終了するということを身につけさせることで、高学年になっても時間になればやめられるという意見が出された。

２　人とかかわる力を育てるための指導

（１）各研究活動の傾向

名古屋は、「自分の思いや考えを表現できる生徒の育成」をテーマに、新聞づくりの実践を行った。思いや考えをまとめる方法を習得するための「インタビューをしよう」の学習では、５Ｗ１Ｈについて学び、それをいかして質問を考えるという活動を行った。ワークシートを活用し、教員との会話を繰り返していくことで、「～は、なんですか」という文法を使って、質問をつくることができた。インタビューをする時には、身近な同級生にインタビューをしようと言葉をかけると、安心して取り組む姿がみられ、「先生にも質問したい」という積極的な言葉が聞かれた。次に、自分の思いを表現することに自信を高めるための「多くの人に伝えよう」の学習では、興味のあるパソコンを使って新聞づくりに取り組んだ。意欲的に授業に参加し、写真を取り込む活動では、相談をする姿もみられた。完成した新聞を他学年の生徒や保護者に称賛されたことで、自信を高められた様子がみられた。新聞づくりに取り組む中で、他の場面でも自分の思いや困っていることを言葉で表現する姿がみられ、本実践が自分の思いや考えを表現できる生徒の育成に有効であったと報告された。

小牧は、児童生徒の成長をめざして小学校・中学校が連携して指導を行っている。「子どもや学級の成長をめざした指導方法の研究」をテーマとする、小中学校交流行事の実践が報告された。交流行事は小学校への授業参観、中学校の体験学習、季節毎の行事などが行われている。交流会や宿泊学習・遠足などは中学生が企画運営をして、小学生の世話をし

たり、活動を手伝ったりしている。対象児童は、小学校では周りの状況よりも自分の都合を優先させるなどして、トラブルが多かったが、中学生となり、自身が小学生のときに接してもらったように、優しく温かい態度で小学生と接する姿がみられるようになった。中学生は小学生に喜ばれ、保護者からも褒められることで自信をもつことができ、小学生は望ましい中学生の姿を見て、よいモデルを学ぶことができている。このような連携した指導が学級の温かい雰囲気づくりにつながり、子どもの成長を促していると考えられる。現在中断している学校もあるが、デジタル機器を使うなどの工夫をして継続していきたい、と報告された。

稲沢は、「豊かなかかわり合いの中で、互いに認め合い、ともに生きる児童生徒の育成」をテーマに、交流及び共同学習での実践を行った。昨年の、教科指導に重点を置いた実践の課題をふまえ、自立活動を中心とした実践を行った。児童の「特性を生かせる活動」として乗って遊べる電車をつくる活動を設定し、交流学級の児童とともに「かかわりを生む活動」を繰り返し行ったことで、児童の意欲が増し、友だちと一緒に遊ぶよさを感じることができたと考えられた。さらに「協同的な学習の学びの場」を設定したことで、線路や駅づくりで力を合わせて活動し、お互いのよさを認める様子がみられ、楽しさを共有することができたと考えられる。さらに、教職員間で児童の特性を共有し話し合いながら活動をすすめることで、児童の実態に合った支援を行うことができた。また、教職員にむけた研修を行うことで学校全体の特別支援教育に対する理解や関心を高めることができた。課題としては、年間を見通したカリキュラムマネジメントを行い、関係職員の負担を減らしていくこと、他の学年の児童にも広げていくことなどが報告された。

岡崎は、「自分と相手のよさを認め合い、他者とのよりよい関係を築こうとする生徒の育成」をテーマに、道徳の実践を行った。特別支援学級には、さまざまな生徒がおり、かかわりの中には、思いやりに欠ける言動や、自己肯定感の低さが感じられる言動もみられる。よりよい人間関係を築いていくために、以下のような手だてを用い、授業を行った。自他のよいところを認められるような題材を選び、内容理解を助けるために紙芝居や生徒の理解度に合ったワークシートを使用した。さらに、自分の考えを相手に伝える「スマイルタイム」を設定した。「スマイルタイム」では、「聞かれたら必ず答えよう」、などのルールを明確に示す、あらかじめ付箋に言葉を記入し、やり取りをするなどの手だてにより、生徒が安心し、意欲的に取り組む姿がみられた。授業の中では、友だちの言葉から自分のよさに気付き、さらにのばしていこうと考える生徒たちの姿がみられるようになった。他の授業でもそのような姿がみられるようになり、手だてが有効であったと報告された。

西尾は、「人とかかわる楽しさを味わう子どもの育成」をテーマに、人とかかわりながら活動を楽しみたい、という児童の思いをいかして、総合的な学習の時間にパラリンピックを教材とした実践を行った。自分たちで友だちや家族を招待して「わかリンピック」を開催するという目標をもち、計画、競技の工夫、宣伝活動などを行った。児童が意欲をもった活動を行うことで、友だちとかかわり、自分の思いを伝えようとする姿がみられた。また、動画を撮り、見返すことで自分の考えなどを想起し、ワークシートの記入や発言に役立てることができた。「わかリンピック」を開催したあとの振り返りでは、友だちに楽しんでもらうことができたことを実感し、さらに他の人たちともかかわりたいという意欲をもつ姿がみられた。本実践では、子どもどうしで話し合いを続けることが難しく、教師が間に入ることで、教師と児童のやりとりになってしまったので、動画を活用するなどしてかかわりを深めさせていきたいと報告があった。

（２）各研究活動の傾向

各リポートの提案を受け、「交流及び共同学習」において、交流学級と特別支援学級の児童の交流をすすめていくとりくみについて質問がされた。担任どうしで事前事後の打ち合

わせの時間がとれないということが問題となるが、稲沢では、職員共通サーバー上に「かかわりメモ」を作成し、時間のあるときにそれぞれの担任が書き込むという工夫がされているとのことであった。交流をすすめていくには、交流学級担任の協力がとても大きいと考えられる。それだけではなく、支援学級の担任も児童と一緒に休み時間に交流学級へ遊びに行くなどして、児童とよい関係をつくるよう努力しているとのことであった。また、実践で報告された抽出児以外の児童にもかかわりが深まる様子がみられ、実践は有効であったと報告された。特に、知的学級の児童はコミュニケーションがとりやすく、交流しやすいのではないかと考えられる。休み時間や体育の授業などで、交流学級の友だちの輪に入り、受け入れられている様子がみられたとのことであった。また、他害のある児童は交流が難しいと考えられる。そのような児童に対しては、全校で行うアンガ―マネージメントの実践や、パニック時のクッションの活用などが効果的であると報告された。このような支援は、交流学級の子どもたちの成長をねらって行うという視点も大切であるという意見が出された。

次に、小・中連携の交流行事について意見が交わされた。小牧では、中学生が企画運営をしているとのことで、小学生によいモデルになっている。会の流れは、季節などによりある程度決まっているので、その中のゲームを企画するなど、できる範囲で取り組んでいるとのことだった。他地区でも、近年、交流行事は縮小傾向であるが、小学校どうしで行う、学校行事に招待する、小規模の運動会を行う、Zoom・Teams などを活用する、といった工夫をして行っているとのことだった。

また、自己肯定感を高めるための取り組みについて意見が交わされた。児童生徒自身がかかわりをもちたい、交流をしたいと思える内容とはどのようなものか、教員が考える必要があるのではないか。児童生徒の自己肯定感を高められるように、やりたいと思ったことを実現する達成感や、次もやりたいという意欲がもてるように支援していきたいという意見が出された。

３　特別支援教育をどうすすめるか

（１）　各研究活動の傾向

一宮は、「子どもの実態や課題に応じた支援の方法や内容のあり方」というテーマでの研究であった。特別支援学級に在籍する子どもたちのつまずきや困難を軽減したり、解消したりするために、全教育活動の中で自立活動の内容を取り入れた幅広い内容で、子どもたちの困り感に寄り添う教材・教具の工夫について研究されていた。当日の発表にあった「ＳＳＴカルタ」をはじめ、レポートにまとめられた教材・教具は、どれも明日からすぐに役立てることができそうな、興味深く参考になるものだった。実践校では、教材・教具を開発することにより、子どもたちの「できる」「わかった」という思いにつなげることができ、児童が自主的・主体的に学習をすすめることができるようになったと報告された。

愛知は「学ぶ喜びを味わえる授業を通して、意欲的に課題に取り組み、自ら解決できる児童の育成～自閉症・情緒障害の児童へのタブレット端末を用いた実践を通して～」をいうテーマでの研究であった。教員が出した課題に意欲的に取り組むことができず、精神的に不安定になってしまう児童が、タブレット端末を用いた課題には意欲的に取り組むことができたことから、タブレット端末を活用し、目的意識をもたせて課題に取り組ませることで、学ぶ喜びを味わい、意欲的に取り組むのではないか、という考えのもと研究はすすめられた。発表の中では、レゴエデュケーションを用いたプログラミング学習について、興味深い実践が報告された。失敗をするとすぐに投げ出してしまう児童が、課題を途中で投げ出すことなく、ねばり強く取り組むことができたことや、自分の

取り組みについて自信をもって発表することができたことなどの成果が報告された。

海部は、「困り感がある子どもたちへの理解を深め、学校全体でとりくむ支援の工夫」というテーマで、昨年度から学校全体で取り組んでいる実践について発表があった。子どもたちの学習面・生活面での「困り」に注目し、何に困り感をもっているのかを理解し、必要な配慮や支援を話し合って解決へつなげていくことができるように、校内相談体制（学年カンファレンス）の充実をさせていた。また、カンファレンス後に行う教育活動に、特別支援学級の担任もかかわることで、指導の成果を確かめたり、継続的な工夫をしたりしていた。このような取り組みを継続的に行うことで、異動で新しく担任になった教員も一緒に児童が抱える「困り」について理解を深めることができたり、特別支援教育の考え方や知識に触れ、児童の発達に合わせた支援を行うこともできたりした。さらに、いつでも気軽に相談しやすい体制をつくることができ、教員間のコミュニケーションが活発になり、学校全体が活気づいたように感じると、報告があった。

豊田は、「通常学級におけるユニバーサルデザインの考えを取り入れた授業実践」というテーマでのとりくみについて発表があった。配慮を要する子どもたちにとって「ないと困る」支援は、他の子どもたちにとっての「あると便利で役に立つ」支援であるという考えのもと、焦点化、視覚化、共有化の「授業のＵＤの三要件」を取り入れた授業の実践について報告があった。全校体制で児童の特性についてアセスメントを行い、ＵＤ化された授業を行うことで、支援が必要な児童の意欲的な姿勢がみられるようになった。また、他の子どもたちも思考過程が明確化され、自発的に問題解決をする姿につながったという成果があったとのことだった。

（２）　討論の中心

各レポートの発表を受け、特別支援教育をどのようにすすめるかというテーマで意見を述べていただく中で、「困り感の見取りの難しさ」について話題に上った。何人もの教員の方々から、困り感を見取ることに難しさを感じるという声が出た。どのように困り感に気付き正しく見取るのかについて意見が交わされた。

特別支援学級の担任の入れ替わりが多いという学校の教員からは、特別支援学級の担任の専門性の向上が必要ではないかとの意見が出た。ある教員からは、「勤務先の学校も困り感を抱える子どもたちが多いものの、中には自分から助けてほしいことや困っていることを表出できない子どもたちがいる。従って、学級担任の話だけではなく、スクールカウンセラーとの面談の機会を設けたり、養護教員や教育相談のコーディネーターにもかかわってもらったりするなど、多くの職員でかかわる中で困り感をとらえるようにしている」という意見が出た。また、医療機関での専門的な視点を理解することも必要であるため、医療機関に行くときに教員も同行させてもらっているという学校もあった。その他、「先を見通せずに感じている不安や困り感もあると思う。先のゴールを見据えて、何が今必要かを明確にすることが大切ではないか」という意見も出た。

４　助言

名古屋市立天白養護学校の工藤高裕さんから、分科会の中心テーマである「豊かに生きるための力を育む」ことをふまえながら、討論の三本の柱に沿って総括があった。それぞれの三本の柱をふまえた実践は、特別支援教育の今日的課題をふまえたすばらしい内容であり、目の前の子どもたちがみるみる成長していく様子がうかがえるものと評価された。今回の実践を受けて、今後の課題となっていく「自立活動の指導」「ＩＣＴ機器を活用した指導」「人とのかかわりを高めるための指導」「キャリア教育」の４点を中心にした話が述べられた。

まず「自立活動の指導」であるが、本年度は全体的に自立活動に関する実践が多く発表された。自立活動は障害のある子どもたちがこれからの社会をより主体的に豊かに生きていく

ための力を育むために、さらなる指導の充実が求められている。今回の発表では子どもの学習上、生活上の困難さを克服することのみならず、子どもたちの得意なところを生かしながら指導をすすめ、成果につなげた指導実践が多くみられた。子どもたち一人ひとりが抱える困難さ、得意さはそれぞれ異なる。このことから百人いれば百通りの自立活動があるものだと考えている。自立活動の指導は、それに基づいて個別の学習が基本だととらえる。個別の自立活動を行うことで一人ひとりの課題に応じた、きめ細かな指導が可能になる。また刺激の調整と最適な学習環境の設定も容易になる。しかし子どもの指導目標を達成するうえで、個別ではなく集団を構成して自立活動を指導することが効果的である場合も考えられる。例えば人とのかかわり合いを通じて、コミュニケーション能力の向上が期待できる。個別の学習だけでは見えなかった新たな課題が見えてくるといったようなメリットがある。しかし、集団で自立活動の指導を行う際でも、自立活動の指導内容を個別に設定することが重要である。自立活動の指導内容を設定するに当たっては、流れ図などを活用しながら、子どもたちの的確な実態把握、課題の抽出、目標の設定、そして指導の内容や方法の設定にとりくめるとよい。さらに自立活動の評価を通じて、目標や指導内容、方法が適切であったかを整理し、授業改善につなげていくことで自立活動の指導がより充実していくと考える。また、学習指導要領にも記載されているが自立活動は、自立活動の時間はもとより、学校教育全体を通じて行うものであるということを意識していく必要がある。自立活動の時間だけではなく、各教科、特別活動、総合的な学習の時間など、学校生活のあらゆる場面で子どもの課題を意識しながら、自立活動をすすめていくことで、子どもの調和的発達が促されると述べられた。

次にＩＣＴ機器を活用した指導であるが、今回の発表では、どの柱においても多くの教員がタブレット端末などのＩＣＴ機器を活用しながら実践に取り組まれる様子がみられた。また「学習指導をどのようにすすめていくか」という討論においても活発な議論が行われたと評価された。特別支援教育におけるＩＣＴ機器の活用の視点は、大きく分けて２点あると考える。まず一つめだが教科指導の効果を高めたり、情報活用能力の育成を図ったりするためにＩＣＴ機器を活用するという点である。今回の先生方の実践においては、学習指導において漢字や計算などのアプリケーションを活用しながら子どもの学習意欲や学習効果を高めていく工夫が報告された。また子どもが実際タブレット端末を活用して、主体的に調べ学習に取り組んだり、学習した内容をまとめたりする様子が報告された。このように教科指導の効果を高めたり、情報活用能力の育成を図ったりするためにＩＣＴ機器を活用することは障害のある子どものみならず、どの子どもたちにとっても、大変重要な視点である。二つめの視点は、障害による学習上、生活上の困難さを克服するためにＩＣＴ機器を活用するという点である。これは先にも述べた通り、自立活動の指導とも大きく関連する視点である。障害の特性やそれに伴う学びにくさ、それは個人差が大きいと考えられる。このことから各教科および自立活動の指導においては、個々の実態に応じてＩＣＴ機器を効果的に活用していくことが求められている。今回の発表においても知的障害や発達障害のある子どもに対して、抽象的な学習内容にＩＣＴ機器を活用しながら、視覚化することで思考を促す実践が報告された。そして知的障害や発達障害により、学びにくさやコミュニケーションの困難な子どもに対して、学習内容の理解を促すことや、自らの意思表示を支援するためにＩＣＴ機器を活用することは大変有効であると考える。それに対し、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、病弱など、身体の障害による学習上の困難のある子どもに対しては、障害の特性に応じたＩＣＴ機器や補助具の活用が必要とされている。今回の発表でも肢体不自由のある生徒に自分の活動や動きを客観的にiPadで見せて、力の入れ具合や動かし方を工夫させる実践がみられた。今後、子どもの実態や各教科の領域における指導目標、指導環境などを考慮しながら、ＩＣＴ機器をうまく活用して子どもへの学習効果を高めていきたいと考えると述べられた。

次に「人とのかかわりを高める指導」についてである。このテーマについては５名の先生

から発表があったが、その他にも多くの先生方の実践があった。特別支援教育において人とのかかわりを育てること、これは他者を意識して、他者を理解して、自分だけの方法で、他者からの働きかけに応じたり、自分で伝えたりする力、相手を意識したりしてともに行動する力であると考えられる。文部科学省のキャリア教育の手引きや特別支援学校の学習指導要領によると、人とかかわる力つまり人間関係能力の育成は、自立や社会参加に向け、最も重要な課題であると指摘されている。これらの力についてものばしていけるとよいと述べられた。

続いて「キャリア教育」についてである。今回、提案された中にキャリア教育に関する実践がいくつかみられた。キャリア教育というと就業体験や進路指導などにみられがちだが、本来はキャリア形成のために必要なさまざまな能力を学校の教育全体を通じて行うものとして、文部科学省では定義されている。（工藤さん自身が）高等部の教務主任をしているが子どもたちと接していく中で、どうしても次の学習活動で主体性が十分ではないと思う子どもがいる。誰かに指示されたことに一生懸命とりくむ態度は大切だが、やはり子どもたちには自己理解にもとづいて自分の考えをしっかりともって、社会において主体的に行動できる力を、学校を卒業するまでに身につけさせたいと常々願っている。これがまさに形がい的な自立だけにとどまらず、将来の人格の自立につながるものであって、本分科会のテーマでもある「豊かに生きるための力」になると考える。そこで社会への入口に近い特別支援学校高等部の生徒に主体的に行動できる力を、３年間で育てるためにはどうしても時間が足りない。小学校の早い段階からキャリア教育をすすめて欲しいと述べられた。

今回の 16 名の先生方が発表された実践は特別支援教育を推進していく上で、たいへん貴重なものだった。今回の分科会に出られた先生は、今回の実践を学校に持ち帰ってもらい多くの先生と共有してほしいと思っている。また「豊かに生きる力を育てること」、これは私たちがこれから先も追究していく大きな課題であると考えているので、今回のような発表や討論は私たちにとってたいへん貴重な学びの場だった。今後、教員と子どもたちの力がつくようにぜひ学び合えたらよいと述べられた。

愛知県医療療育総合センター中央病院の杉山由佳さんからは、特別支援学級の子どもたちには個別の対応が必要な子が多いと述べられた。その中でも自閉症スペクトラムの子どもたちは、興味をもちにくい、興味の幅が狭い、こだわりが強い、切りかえが苦手、集団で時間が決まっていることを行ったり、教科書的な座学を行ったりすることが難しいことが多い。裏を返せばそういった特性は、人に流されない、不屈である、一つのことを高めていく、没頭していく能力を有していると言える。そういった特性に配慮して、彼らの興味関心があるところからアプローチすることで、子どもたちのよさを引き出している発表が多くみられた。また、今回はＩＣＴ関連の発表が多く、その中でも、タブレット端末を終わらせることができない課題が討論の中で多く発言された。このように切りかえの苦手さ、気持ちのコントロールの苦手さがある子に対して、まずはタブレット端末とは切り離して、クールダウンの練習をすることが必要であることを述べられた。子どもによって他害があったり、言葉で表現できたり、さまざまな段階があるので、その子どもの課題がどこにあるかをふまえた上で、短期の目標を設定し、それに合わせたそれぞれの子どもに応じたクールダウンの仕方があるので、試行錯誤して定まったら、クールダウンの練習をしていくとよい。また、パニックになった最中は、指導は入らないので、子どもたちがいつもの状態に戻った時に「にこにこに戻ったね、よかったね」という声かけをしたり、にこにこに戻った時に楽しい活動を入れたりすることも大切である。さらに、クールダウンの練習を振り返る際、具体的な行動を伝えてあげることや、子どもがつぶやいた言葉に対して共感の姿勢を示してあげることは大切である。そして、タブレット端末を使うときの約束を子どもたちとする際、子どもたちがニュートラルな気持ちの時に伝えることや、家庭生活の中でも日程調整ができたり、約束が守れ

たり、ゲームをやめることができたら、インセンティブのある活動ができるようにするとよい。タブレット端末は子どもたちの居場所になっていたり、いろいろな人とかかわりをもったりして、子どもたちの活動がひろがっていくこともあるため、一概に制限するべきではない。特に高学年で、タブレット端末を制限する場合は代わりのものを用意してあげることが大切である。交流学級の活動については、以前よりも配慮が受けられるようになってきている。交流学級の低学年の児童は、子どもたちの方が柔軟であり、特別支援学級の児童で能力を発揮した時に、リスペクトされることも多い。一方で高学年になると、こうでなければいけないというルールに重きを置く面が見られるようになる。通常の学級の子どもたちへのアプローチが今後の課題であると述べられた。

５　まとめと今後の課題

子どもたち一人ひとりの実態に合った支援の内容や、指導のあり方についてのリポートが数多く提出された。それらの発表を受け、討論を行った。その結果、教育課程編成の基本的な考え方が明らかになった。

○　特別支援教育においてＩＣＴ機器を活用する場合、インターネットの使用をどこまで規制するか、タブレット端末の使い方でトラブルになる事例などがみられるが、これに対して、学校全体での共有、保護者との連携が必要である。

○　タブレット端末が子どもたち自身の心の拠り所になっていることがあるので、そうした子どもたちのタブレット端末を使用したい気持ちに寄り添うことも大切であることが確認された。

○　「交流及び共同学習」において交流をすすめていく上で、職員共通サーバー上に「かかわりメモ」を作成するなど、担任どうしでの協力がとても大きいことが再認識された。

○　「小・中連携の学校同士の交流行事」について中学生がリーダーシップを取ることで、小学生のよいモデルとなっている。

○　「交流」は特別支援学級と通常の学級の双方の子どもたちに意義深い活動を行うことが重要であり、教員主導で活動を考えるのではなく、子どもたちの思いを加味していく大切さが確認された。

○　よりよい特別支援教育の実現をめざし、特別支援学級と通常の学級との「垣根」を低くし、教員や子どもも風通しのよい関係を学校全体でつくっていくことの大切さが確認された。

○　「子どもの困り感をどのようにとらえているか」という問題定義がされ、担任のみではなく、特別支援教育コーディネーターやスクールカウンセラー、医師や福祉関係者などとも連携して、子どもの困り感をとらえていくことの重要性が確認された。

●　個々の子どもの得意にもとづいたきめ細かな自立活動の実践。

●　ＩＣＴ機器を活用した、教科の指導向上や障害による学習上及び生活上の困難さの克服、子どもの実態などを考慮した実践。

●　人とのかかわりについての多様な実践。

●　キャリア形成や自己理解につながるキャリア教育の実践。